

「もうひとつの世界」を生きる

——現代エジプトの修道制と修道者たち

三代川寛子

エジプトはキリスト教の修道制発祥の地であり、多くの場合、修道制の歴史はエジプトの隠修士アントニオス（西暦 251 頃–356 年）から書き起こされる。しかしそうした修道制の歴史は、たいていはローマ・カトリック教会の修道制を主要な関心としているため、アントニオスの後すぐに小アジアやローマ帝国における修道制に関心を移し、以後エジプトは忘れ去られてしまいがちである¹。

しかしながら、現在コプト正教会と呼ばれているアレクサンドリア教会は、時代によって盛衰はありつつも 4 世紀以降現在に至るまでエジプト各地に修道院を維持してきており、20 世紀半ば以降の復興運動を経た現在では、同教会の修道院はこれまでにない活況を呈している。そこで本稿では、現代エジプトの修道院および修道者たちの姿を通して、彼ら、彼女らの生きる「もうひとつの世界」を描いていきたい。

1. 修道生活の父、聖アントニオス

修道生活の父と呼ばれるアントニオスの一生については、アレクサンドリアのアタナシオス（298–373 年）が『アントニオス伝』（357 年頃）として書き残しており、元のギリシア語版に加えてラテン語、コプト語など複数の言語に翻訳された写本が現代に伝えられている²。

それによると、アントニオスはキマンという名の村（現在のバニー・スワイフ県カムン・アル＝アルス村）に住む裕福なキリスト教徒の両親のもとに生まれた。18 歳あるいは 20 歳の時に両親を亡くし、半年近く経った後、教会で「イエスは言われた。『もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。』」（マタイによる福音書、第 19 章 21 節³）という聖書の一節が読み上げられるのを聞いた。自分のために朗読が行われたかのように感じたアントニオスは、その言葉に従うべく財産を処分して貧しい人々に与え、妹を「信仰あつい乙女たちの共同体」に預け、村の外に隠修士として暮らし始めた。当時、村外れで禁欲的な生活を送る隠遁者たちが既に存在しており、アントニオスはそうした先達たちから教えを受けて隠遁生活を開始したのである。また、「信仰あつい乙女たちの共同体」とあることから、何らかの形で修道生活を送る未婚女性たちも存在したようである。やがてアントニオスは村外れから砂漠に移り、墓に閉じこもって外の世界との接触を断った形で隠遁生活を送るようになるが、たびたび悪魔の誘惑を経験した。悪魔は修行を妨害するべく、さまざまな幻像を見せ脅迫したり誘惑したりしたが、アントニオスは十字架のしるしと信仰によってこれらの試みに打ち勝ったという。

アントニオスのもとには多くの弟子が集まり、その一人とされるエジプトのマカリオ

1 フランク（2002）、杉崎（2015）などによる修道制の歴史がその例といえるだろう。

2 なお、『アントニオス伝』の英語訳には Athanasius（2003）、日本語訳にはアタナシオス（2016）がある。キリスト教修道制の成立については、戸田（2008）が詳しい。

3 本文中の聖書の引用には、新共同訳 1987 年版を用いた。



ス⁴ (300年頃–390年頃) によってスケーティス (現在のワーディー・アン＝ナトゥルーン) に修道生活の礎が築かれていった。それに留まらず、砂漠の師父たちの生き方に倣おうと周辺諸国からエジプトを訪問あるいは滞在する者たちが現れ、これらの修行者らの手によってエジプトの外に修道制が広まっていった。その中には、現在でもギリシア正教会で使用されている修道規則を整備したカイサレイアのバシレイオス (330年頃–379年) や、マルセイユに修道院を建設したことで知られるヨハネス・カッシアヌス (360年頃–430年頃) などが含まれていた。

このアントニオスに始まる修道生活は、当初は独居庵に住む修道士たちが時折説教や指導のために集まるといった形態を取っていたが、同じくエジプト出身のパコミオス (290年頃–347年頃) によって、修道院長と規則のもとで修道士たちが修道院に共住する共住修道制へと整備されていった。このパコミオスの成文規則の原典は散逸してしまっているが、コプト語の断片やギリシア語の抜粋は現在まで残されている。パコミオスの規則は、東方ではバシレイオス、西方ではベネディクトゥスによる修道規則に影響を与えた。また、パコミオスは上エジプトに9つの男子修道院と2つの女子修道院を建てたとされている (杉崎 2015: 25)。

2. 現在のコプト正教の修道院をめぐる状況

エジプトの教会は、その後451年のカルケドン公会議の際にカルケドン派 (のちのギリシア正教会) と非カルケドン派 (のちのコプト正教会) に分裂して対立を経験し、その後も639–642年のアラブ軍によるエジプト征服以後はイスラーム諸王朝の支配下に入り、時代によっては迫害を受けるなどして時代の波にもまれた。エジプトの修道院もまた、そうした時代の変化の影響を受けたが、コプト正教会において修道制自体は現在に至るまで連綿と受け継がれてきている。

それでは、千数百年の時を経て、現代のコプト正教会の修道院はどのような状況にあるのだろうか。1960年の時点で、エジプトのコプト正教会に属する男子修道院で、修道士が実際に住んでいたものは9か所だったとされている。すなわち、紅海の砂漠に位置するアントニオス修道院、パウロ修道院、そしてナイル・デルタの南西、ワーディー・アン＝ナトゥルーンに位置するバラームス修道院、スリヤーン修道院、ビショイ修道院、マカリオス修道院、そしてファイユームに位置するサムーイール修道院、クースィーヤに位置するムハツラク修道院、アレクサンドリアの西の砂漠に位置するメナス修道院である (Meinardus 2003: x)。このうち、最後のメナス修道院は、1959年に当時着座したばかりの総主教キリルス6世 (在位1959–1971年) が聖メナスの巡礼都市の遺跡 (1905年発掘) のすぐ隣に新設したものである。

このほかにも、かつて修道士が暮らしていたが、迫害、遊牧民の襲撃、疫病、飢饉などにより放棄され、場合によっては荒廃したまま数世紀が経過した修道院がエジプトには多数存在する。近年では、そうした放棄された修道院に修道士たちが再び暮らし始めるようになっており⁵、2008年の時点では、エジプト国内で19の修道院で修道士たちが暮らしている (Elsässer 2014: 52)。このような再興された修道院には、ルクソール県やエドフ県など上エジプトのパコミオス修道院などが含まれる。このように再興された、あるいは新設された修道院は、修道院長や司教、総主教など高位聖職者によって構成される教会会議 (al-majma' al-muqaddas) の承認を経て正式にコプト正教会に属する修道院として認められる。

4 ただし、Guillaumont (1991) は、『聖マカリオス伝』などコプトの間に伝わる伝承において、アントニオスとマカリオスの師弟関係が誇張される傾向があると指摘しており、おそらくマカリオスはアントニオスを2度訪問しただけであろうとしている。

5 こうした放棄された修道院を復興する動きは、キリルス5世 (在位1874–1929年) の時代までさかのぼることができるが、実際に復興が進んだのは20世紀後半に入ってからであった (van Doorn-Harder 1995: 41)。

また、エジプト国外では、歴史的に関係の深いエルサレムに2つ、スーダンに1つ⁶、そして1950年代以降徐々に進んだコプト正教徒の海外移住に伴い、アメリカとカナダに合わせて4つ、オーストラリアに2つ、イタリア、ドイツ、オーストリアに各1つ、コプト正教の修道院が建てられている。加えて、1970年代以降のアフリカ宣教の成功を反映して、

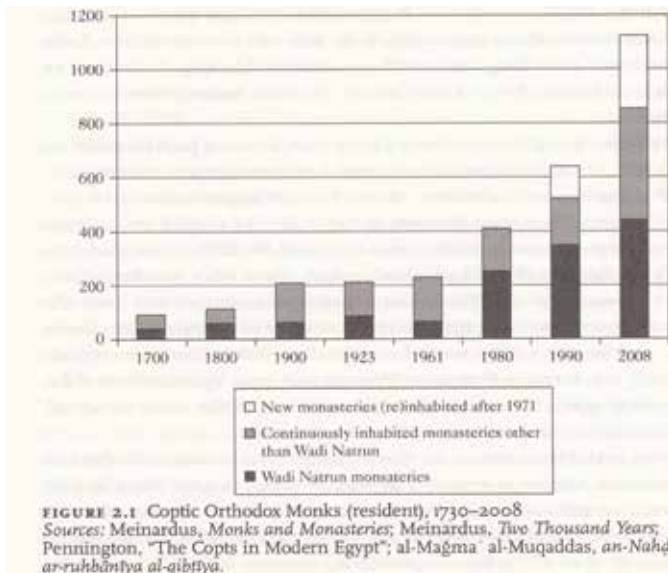


FIGURE 2.1 Coptic Orthodox Monks (resident), 1730–2008
Sources: Meinardus, *Monks and Monasteries*; Meinardus, *Five Thousand Years*; Pennington, "The Copts in Modern Egypt"; al-Magħma' al-Muqaddas, *an-Nahda ar-rūḥāniyya al-qibṭiyya*.

【グラフ】コプト正教の修道士数（修道院に暮らす者）1730–2008年。出典：(Elsässer 2014: 50)

ケニアに2つ、ジンバブエに1つ、南アフリカに1つ修道院が建設されている (Mawqi' al-'Anbā Taklā Hīmānūt)。

また、左のグラフは、Elsässer (2014: 50) によるエジプトの修道院に暮らす修道士⁷の人数の変化を示したものである。ここから、1900年から1961年までの間、エジプトの修道院に暮らす修道士の数は200名ほどで推移していたが、以後1980年には400名、1990年には600名、2008年には1100名を超えるなど、この1961年以降その数が大幅に増加していることが読み取れるだろう。この間、エジプト全体の人口もまた1960年の2,663万人から2008年の7,963万人へとおよそ3倍に増加してきたが (PopulationPyramid.net. 2019a; PopulationPyramid.net. 2019b)、

それと比しても増加率が高い。また、海外移住、改宗、ムスリムと比較して低い出生率などの要因から、エジプト全体の人口に対するコプト正教徒の人口比率は漸減していると推測されている (Chitham 1986: 36)。それらの要因を考慮すると、この修道士の数の増加は、エジプト全体の人口増加に伴う現象ではなく、コプト正教徒の間で修道生活を志す傾向が強まっていることを示していると考えてよいだろう。

なお、上に述べてきたのは男子修道院についてであるが、女子修道院の存在も忘れてはならないだろう。4世紀のアントニオスの時代、上述のようにアントニオスが隠遁生活に入る際に自身の妹を預けた「信仰あつい乙女たちの共同体」が存在していたことが知られており、またパコミオスの姉妹マリアもまた女子修道院の院長であったとされている。その後の時代にも女性の修道者たちは存在しており、いくつかの女子修道院が建てられたが、オールド・カイロ地区のアブー・サイファイン修道院などの例にみられるように、多くの場合女子修道院はその当時の総主教座の敷地内に設置されていたようである (van Doorn-Harder 1995: 41–42)。

van Doorn-Harder (1995: 34–36) によると、1995年当時、エジプトにあるコプト正教の女子修道院はカイロに5つ、すなわちオールド・カイロ地区にマーリ・ギルギス修道院とアブー・サイファイン修道院の2つ、ハーラ・ズワイラ地区にマーリ・ギルギス修道院と聖処女修道院の2つ、ハーラ・ルーム地区にアミール・タードゥルス修道院の1つが存在し、それに加えてナイル・デルタの北のダミエッタ教区に位置するディムヤーナ修道院の全部で6つであった。しかしその後、女子修道院はミニヤ県に1つ、エルサレムに1つ追加されたようである (Mawqi' al-'Anbā Taklā Hīmānūt)。これらの女子修道院に暮らす修道女の数は1995年の時点で485名と推測されており (van Doorn-Harder 1995: 36)、2002年の時点では459名とされている (al-'Anbā Makāriyūs 2005: 28)。

このような修道院および修道者数の増加の背景には、コプト正教会における宗教復興が

⁶ ただし、教会会議によって正式に認可されたのは1997年である。

⁷ 修道士の中には、修道院に住まず、修道院の外で隠遁生活を営む者や、市街地に勤務する修道士も存在するが、その正確な人数は不明である。なお、1995年の段階で、修道院に住む修道士と修道院の外で活動する修道士を合わせた数は1000名を超えると推測されている (van Doorn-Harder 1995: 39)。

あった。van Doorn-Harder (1995: 2) によると、20世紀半ばまでは、教会全体が「教育水準が低く、退屈で後進的な」聖職者たちに率いられており、それに伴い修道院も「社会的落伍者の避難所」になっていた。女子修道院に関する1880年代の記録によると、コプトの女子修道院には「水たばこを吸いながら一日中座っているだけの東洋人の女性たち (Jullien 1889: 235)」がいるのみで、「彼女らは文字が読めず」、なんらの霊的指導も受けていない様子だった (Jullien 1889: 235-236) とされている。20世紀前半の段階でも女子修道院は「引退者、老人、障害者、寡婦たち (アティーヤ 2014: 180)」がいるばかりで、20世紀半ばごろのワーディー・アン＝ナトゥルーンの男子修道院も「僧院内は、荒れ放題の、まるで乞食の巣窟だった (山形 1998: 54)」という。

また、20世紀前半ごろまでの司祭たちは貧困層の出身者が多く、彼らの収入は現在のようには月給制で保障されていなかったため、典礼の際の献金や洗礼、結婚、葬儀の際の謝金を直接の収入源としていた。そのため彼らは半ば乞食のような扱いを受けており、西洋式の高等教育を受けた中・上流の俗人信徒たちから見て、到底尊敬できる存在ではなかった (Hasan 2003: 74)。また、経済的に不安定な立場であることは、聖職者たちの腐敗を招いた。その代表例が総主教ユサーブ2世 (在位1946-1956) で、自らの補佐役が聖職売買を行っているのを知りながら制御できずに批判を集め、やがて1954年に急進的なコプトの若者たちに誘拐された (Hasan 2003: 59-60)。誘拐犯グループは直ちに逮捕されたが、ユサーブ2世は上述の教会会議および有力な俗人信徒たちによって構成される共同体会議 (al-majlis al-milli) の双方によって不適任と判断され、退位させられた。ユサーブ2世は、当時の教会指導者たちの後進性と墮落を象徴する存在だったのである (Elsässer 2014: 46)。

しかし、そうした状況と並行して、俗人信徒のエリート層による教会改革に向けた努力と教会内部からの宗教復興運動が合わさり、1918年に日曜学校運動が開始され、1930年代ごろまでには非常に活発な運動となった。この運動の中心的人物として知られているのがハビーブ・ギルギス⁸ (1876-1951年) で、ギルギスは少年少女たちに宗教教育を行うことを重視し、そのための教科書や聖書の簡単な注釈書などを数多く執筆した。日曜学校運動は、宗教的教育と識字教育や職業訓練などの社会福祉運動、史跡訪問やサマーキャンプなどの文化活動を連動させたことから、カイロなどの都市部のみならず上エジプトなどの農村部でも大きな人気を博したのであった。これらの活動は、当時欧米の教会で行われていた教会活動や宗教教育の手法を取り入れたものであったが、同時に日曜学校運動は復古主義的でもあり、コプトの宗教的・文化的遺産を見直し、それを使ってより本来の形に近いコプト的な宗教生活を取り戻そうとする傾向も併せ持っていた (Hasan 2003: 77; Elsässer 2014: 44-45)。

日曜学校運動は、教会で奉仕活動を行う俗人信徒による運動として始まったが、1948年ごろからそうした日曜学校運動で教師などとして活躍していた若い俗人信徒たちが徐々に司祭に叙階されたり修道士になったりして教会組織を構成するメンバーとなっていた。その主要人物として挙げられるのが、後のサム＝イル司教 (1920-1981年)、マッター・アル＝ミスキーン修道院長 (1919-2006年)、そして総主教シェヌーダ3世 (1923-2012年、在位1971-2012年) である。

大半の旧世代の修道士たちは、これらの高学歴で志の高い若者たちを警戒し、当初は多くの修道院が彼らを受け入れなかった。その中で、ワーディー・アン＝ナトゥルーンのスリヤーン修道院の修道院長ティーウフィールスは改革志向の若者たちに対して寛容であったため、同修道院は多くの新世代の教会指導者が集まる場となったのであった (Hasan 2003: 61)。また、当時ミーナー・アル＝バラームスィー修道士 (後の総主教キリルス6世) が砂漠や人里離れた場所で隠修士として祈りの日々を送っており、その禁欲的な生活から宗教指導者として尊敬を集めていた。ミーナー修道士は名目的ながらもファイユームのサム＝イル修道院の修道院長であり、他の修道院で受け入れられなかった改革志向の若者たちを同修道院に受け入れて指導にあたった (Hasan 2003: 86)。

⁸ ハビーブ・ギルギスは、総主教キリルス6世と共に2013年に列聖された。

こうした日曜学校運動世代の修道士らは、1960年代ごろから修道院長、司教、総主教など教会組織を率いる職位に就くようになり、教会改革を推進した。また、司祭や修道者たちの高学歴化が進んだこと、そして前代のユサーブ2世とは対照的な、禁欲的で尊敬された隠修士がキリルス6世として総主教に選出されたことなどから、コプト正教会はようやく威信を取り戻し、現在では聖職者および修道者は俗人信徒たちの尊敬を集める存在となっている。

3. 現在のコプト正教会における修道制

それでは、このような教会復興、特に修道院復興の動きを受けて、現代エジプトのコプト正教会における修道制はどのような変化を経験してきたのであろうか。

まず確認しておくとして、コプト正教会の修道制には、ローマ・カトリック教会の修道会に相当する組織は存在せず、修道者は修道会ではなく修道誓願を立てた修道院に所属する。また、ギリシア正教会における大バシレイオスの『修道士大規定』、『修道士小規定』のような、修道規則の基本法に相当するものも存在しない。つまり、会憲も基本法もないため、コプトの修道者たちには従うべき明確な修道規則が存在しないのである。そのため、コプトの修道者たちは、霊的指導者による指導の下で砂漠の師父たちの言葉や彼らに関連する書を読み、修道生活を送る上での指針とするのである。その際に使用されるのが『修道士たちの庭 (Bustān al-Ruhbān)』という書である。これは1940年代に初めて出版されたもので、10世紀のアラビア語写本およびコプト語、ギリシア語、シリア語の写本を基に編纂された、砂漠の師父たちの残した言葉や伝記をまとめたものである (van Doorn-Harder 1995: 55-56)。この書は、砂漠の師父たちからインスピレーションを得るために、修道者だけではなく俗人信徒たちにも向けて編纂されたのである。ただし、教会指導者らは、砂漠の師父たちの言動は特定の時代の特定の状況の下で行われたものであり、同書を現代人のための修道生活の方法論あるいは生活の指針として読むべきではないと注意喚起しており (al-Anbā Makāriyūs 2005: 21)、実際、同書の内容を直接修道規則とするのは現実的には難しい。

次に、修道院における修道者たちの生活を見ていきたい。他の地域の修道院と同様に、修道者たちは修道院内の生活を維持するため、それぞれが炊事係や渉外係、礼拝係などの役割を分担して行っている。また、コプトの男子修道院の場合、書籍の出版、家具の製作、農作物や畜産物の生産、そしてそれらの販売を通して生計を立て、自給自足している (山形 1998: 26-28)。多くの修道士は、機械を使った大規模な農作業や建築作業などを行いつつ、その日に割り当てられた分の仕事が終わったらその後は自由に時間を過ごしているようである (Bishāy 2008: 122)。自由といっても、祈りの時間を知らせる鐘が聞こえたら集まらなくてはならない (Bishāy 2008: 176)。また、その祈りは一日7回と定められている (右の表参照)。こうした共住型の修道生活は、以下に述べる隠修士としての生活と対比して、大まかにパコミオス式 (Bākhūmī) と総称されている。

修道士たちの一部は、霊的指導者の許可の下で隠修士 (mutawahhid) としての生活を送

●表1——ティ・アクビ (七つの祈り)

1	6:00午前 夜明けの祈り 19の詩篇の朗誦 死からの復活
2	9:00午前 第3時の祈り 12の詩篇の朗誦 聖霊降臨
3	12:00正午 昼の祈り 12の詩篇の朗誦 ユダの裏切りとイエスの受難
4	3:00午後 第9時の祈り 12の詩篇の朗誦 イエスの十字架
5	5:00午後 日没の祈り 12の詩篇の朗誦 「夕暮になり日が沈むと、人々は病人や……」 (マルコ1:32以下)
6	6:00午後 第12時の祈り 12の詩篇の朗誦 死のおとずれ 他にエル・サタールの祈り (眠りは小さな死)
7	12:00 夜 深夜の祈り 詩篇119篇 3回の屈膝

(注) 午前9時を第3時、午後3時を第9時と表現するコプト式時間表示法は、午前7時をもって第1時と数える古来の仕方にもとづいている。なお第1の祈りは、修道院では聖日は午前3時から、平日は4時からはじめられる。

【表】ワーディー・アン＝ナトゥルーン修道院における祈りの種類と時間 出典：(山形 1998: 27)



聖パウロ修道院で庵室を案内する修道士。

出所：2006年9月10日、筆者撮影。

る。その場合、上述のような修道院内の仕事の分担は免除される。隠修士としての生活には「初心者 (mubtadi)」「隠者 (ḥabīs)」「遁世者 (waḥḍa)」の3段階があり、「初心者」の段階では、上述のような共同生活を送りながらできるだけ沈黙を保ち、可能な限り修道院の中にある各修道士専用の庵室 (qillāya あるいは qallāya) で過ごす。そして次の「隠者」の段階では、この庵室で過ごす時間が徐々に長くなり、最終的には数週間をそこで過ごす。その間、隠修士は庵室の外に置いていかれる食糧その他生活必需品を受け取りつつ庵室に閉じこもって暮らす。この間、他の修道士と話をせず、面会者とも会わず手紙も新聞も読まない。そして「遁世者」の段階では、修道院の外に出て、修道院から3～10キロメートルほ

ど離れたところにある砂漠の洞窟 (maghāra) で沈黙と禁欲と祈りの日々を過ごす。彼らは、霊的指導を受けるため、他の修道士たちと共に祈るため、あるいは必要な物資を受け取るためなどの理由で定期的に砂漠から修道院に戻ってくる。毎週日曜に聖体拝領のために戻ってくる者もあれば、40日ごと、あるいは数か月ごとに戻ってくる者もある。霊的指導者の許可の下、完全な隠遁生活を送るためそのまま戻ってこない場合もある⁹。「隠者」および「遁世者」の状態は、その隠修士と神との間の秘められた関係であり、本人はそれを公言しないし、同僚の修道士たちもそれを妨げてはならないことになっている (Bishāy 2008: 178–181)。こうした修道生活の様式は、「固い結びつきのある個人主義 (al-fardiya al-mutarābiṭa)」あるいは「遁世式 (waḥḍa)」などと呼ばれる。

コプトの修道者たちにとって、アントニオスのような隠遁生活こそが理想であり、伝統的には修道生活とは庵室あるいは砂漠の洞窟で隠修士として暮らすことを意味していた。しかし1950年代の修道院改革の時代に、上述のスリヤーン修道院のティーウフィールス修道院長が、書かれた修道規律によって統率される共住型で組織化された修道生活様式を導入しようと試みた。当初、この新しい試みは修道士たちの間で受け入れられず、共住式は定着しなかったが (van Doorn-Harder 1995: 53)、その後もたびたび導入が試みられ、現在では「固い結びつきのある個人主義」式と並んでパコミオス式として定着している。

他に修道士の生活のあり方として挙げられるのは、修道士が修道院の外に出て市中の教会で司祭として司牧にあたる例だろう。かつては特に農村部で司祭が不足していたため、修道院から修道司祭が派遣されることは珍しくなかった。現在でも、市中の教会に勤務する修道司祭の姿を目にすることは稀ではない。その他にも、修道士は総主教や司教の補佐役として総主教座や司教座に勤めたり、あるいは都市部に設置された修道院の事務局に勤務することがある (al-Anbā Makāriyūs 2005: 32)。このように、男子修道院に関しては、一つの修道院の中に「固い結びつきのある個人主義」式やパコミオス式など異なる様式の修道生活を送る修道士たちが混在しており、さらに一部は修道院の外で働いている。

上に述べてきたのは男子修道院の例であるが、女子修道院も同様に観想的な修道生活を重んじてきた。伝統的な観想修道院に暮らすコプトの修道女たちは、涉外係など外の世界と関わる職務を担当している者を除き、生涯修道院の壁の外に出ることはなく、その中で祈りと黙想の日々を送る。女子修道院はカイロなどの都市部あるいは人が住んでいる地域に位置していることから、修道女たちは修道士のように砂漠の洞窟で隠遁生活を営むことはなく、基本的には修道院の中でパコミオス式の修道生活を送っている。

20世紀半ばの修道院復興に際して、パコミオス式の修道生活を最初に女子修道院に導

9 その場合は井戸を掘ってその周りに住み、簡単な農業を営んで自給自足の生活を送るようである。

入したのは、カイロのアブー・サイファイン修道院のイリーニー女子修道院長（1940–2006年）であった。イリーニー修道院長は、パコミオスの伝記や修道規則を参考に独自の修道規則を文書の形にまとめたとされるが、それは修道女や修練者に手渡されることはなく、彼女らは上長や他の修道女たちの言動を見習うことで修道生活のあるべき姿を学ぶ。また、イリーニー修道院長の霊的指導を受けた者たちが後に他の女子修道院の院長になったことから、カイロの大半の女子修道院ではこのパコミオス式が採用されている。ただし上述のように、このパコミオス式という語は「固い結びつきのある個人主義」式に対する共住式の総称であり、同じ名前と呼ばれていても、スリヤーン修道院のティーウフィールス修道院長が導入を試みた制度とイリーニー女子修道院長の制度が同じものであるかどうかは検討を要する。

また、他の修道院から修道女を集めて再興されたダミエッタ教区のディムヤーナ女子修道院では、おそらく修道院内の庵室を使用しているものと思われるが、アントニオスの隠遁生活に倣って「固い結びつきのある個人主義」式の修道生活を実践しているとされる（van Doorn-Harder 1995: 54–58）。

他には、数は少ないようであるが、修道院の外で暮らす女性の隠修士も存在し、多くの場合カイロの教会の敷地内にある専用の小さなアパートに暮らしている。彼女たちは門番に食糧などを供給してもらいながら滅多に外に出ない隠遁生活を営んでおり、聖体拝領をするため、他の修道女たちとともに降誕祭や復活祭を祝うため、あるいは医療サービスを受けるためなど限られた場合を除き、そのアパートに留まって沈黙と祈りと黙想の日々を送っている（van Doorn-Harder 1995: 43）。

このように、コプトの伝統的な修道制は隠遁を志向する傾向が強く、社会生活から隔絶された状態を理想とするのであるが、新しい動きとして、バニー・スワイフ教区のアタナシオス司教の指導の下、1965年に「聖母マリアの娘たち」と呼ばれる活動的な女子修道院が設立されている。これは、かねてより社会福祉活動および教会関連の活動を熱心に行ってきた2名の女性信徒が、アタナシオス司教に社会福祉活動を行いつつ修道生活を送りたいと相談したことを契機として発展したものである。おそらくはローマ・カトリック教会における活動修道会から影響を受けたものと思われる。この「聖母マリアの娘たち」修道院に属する修道女たちは、修道誓願を立てた上で、エジプト各地の幼稚園、学校、病院、障がい者や高齢者向けの養護施設などで使徒職にあたる。1992年の時点で、この修道院には修練者と誓願を済ませた修道女たちを合わせて80名が所属していた（van Doorn-Harder 1995: 37–38, 59）。

この修道院で修道生活を志す志願者たちは、上述の『修道士たちの庭』に加えて『規則 (qānūn)』と呼ばれる小冊子を渡されるが、これも実際の会憲に相当するものではなく、この修道院の設立目的や社会福祉活動が対象とする集団についてまとめたものにすぎない。新しい修道生活様式を取り入れている「聖母マリアの娘たち」修道院でも、他の修道院と同様に、書かれた規則ではなく霊的指導者の助言と監督が組織運営上の要となっているのである。「聖母マリアの娘たち」修道院のあり方は、「奉仕的な修道制 (al-rahbana al-khādima)」などとも呼ばれており、伝統的な修道制 (rahbana) と新しい「奉献制 (takrīs)」と呼ばれるものの間に位置するものとされる (al-Anbā Ghubriyāl 2013)。

この新しい奉献制とは、1958年に上述のmatter・アル＝ミスキーン修道院長が導入を試みたもので、当初は男性の俗人信徒に向けられた制度であった。「奉献された男性たち (mukarrasīn¹⁰)」とは、修道士のように独身生活を送るが、修道誓願は立てず、他のメンバーと共に「奉献の家」と呼ばれる一般の住宅に共住して祈りの日々を過ごす人々である。これもおそらくはカトリック教会における使徒的生活の会¹¹などから影響を受けたも

10 なお、Hasan(2003)は全体を通して「奉献された」という受動分詞を mukharas と綴っているが、一般的な転写方式では mukarras であろうと思われる。

11 なお、使徒的生活の会とは、会員が修道誓願を立てることなく、多くの場合共住してその会固有の使徒的目的を追求するものを指す (サバレーゼ 2018: 137–138)。修道会に類似するが別の種類に属し、その多くが宣教会である。

のようである。マッター・アル＝ミスキーン修道院長は、奉獻制を推進するにあたって、当時の総主教キリルス6世に相談せず、教会会議からの承認も待たずにエジプト各地で「奉獻された男性たち」の共同体を支援した。しかしキリルス6世は元々隠修士であり、伝統的な隠遁を志向する修道制を支持しており、こうした俗世に身を置く形の新しい奉獻生活を導入することには反対であった。奉獻制以外の問題も影響して、最終的に総主教は1960年にマッター・アル＝ミスキーンを修道院長の職から解いて修道院から追放し、奉獻制もその後制度として発展しなかった。なお、マッター・アル＝ミスキーン修道院長は後にキリルス6世と和解し、追放の9年後に復職している (Hasan 2003: 89-90)。

しかしこの奉獻制は、後に総主教シェヌーダ3世によって女性信徒向けの制度として改められ、1981年に導入された。これは、俗人信徒の独身女性を「奉獻された女性 (mukarrasāt)」に任命し、その労働力を教会の社会奉仕活動に役立てる試みであった。「奉獻された女性」は、その教区を管轄する司教の下、女性、高齢者、子どもたちを対象とした社会福祉、医療、教育などの奉仕活動を行う。また、司教や司祭たちの支援のためにアメリカやケニアなど海外に派遣される場合もある。「奉獻された女性」は、修道誓願は立てないが、貞潔の誓いを立てて奉獻生活に入る。その後一定の条件の下で5年後に「女性助祭補 (musā'ida al-shammāsa)」に昇進し、さらにその5年後に「女性助祭 (shammāsa)」に昇進する。その条件とは、信仰心が厚く、言動が善良で、奉仕活動の経験を積んで技能が向上した場合、かつ女性助祭の位への昇進は未婚女性の場合は40歳以上、夫と死別した女性の場合は60歳以上と定められている (al-Anbā Matā'us 2005: 49-50)。ただし、女性助祭といっても聖職者ではないため教会組織の構成員ではなく、男性の助祭のように病者のために聖体を運んだり、典礼で聖書の朗読を行ったりすることはできない。こうした女性助祭も含む「奉獻された女性」たちは、エジプト内外の教区で個別に活動しているためその総数は不明であるが、1995年の時点で恐らく600名ほどが「奉獻された女性」として活動しているものと推測されている (van Doorn-Harder 1995: 38-39)。

このように、20世紀後半を通してコプト正教会において女性たちの活躍の場が教会制度の中で正式に認められてきたのであるが、それが必ずしも教会における女性の地位向上を意味しているわけではないことに注意を払う必要がある。Hasan (2003: 253-255) によると、「奉獻された女性」の奉仕活動を受け入れているのはほぼ下エジプトの司教たちに限られ、ジェンダー規範に関してより保守的な地域である上エジプトの司教たちは、女性が教会関連の職務を担うことに懐疑的であるという。また、「奉獻された女性」たちが担う仕事も幼稚園や孤児院など慣習上女性に割り当てられる仕事に限られており、かつ、例えば助祭や奉仕者 (khādim) などとして教会で奉仕活動をする男性たちと比べて、職務上の自由裁量の幅が狭く、ささいなことでも司教からの許可が必要であるという。こうしたジェンダーに関する問題は、エジプト社会全体にも共通する問題でもあるが、教会内からも今後さらなる議論と改革が必要となる点であろう。

4. 現在のコプト正教会における修道者たち

それでは次に、現代のエジプトで人々はどのようなきっかけで修道生活を志願するようになるのか、そして彼らが修道者になる過程とはどのようなものであるのか、概観していきたい。

al-Anbā Makāriyūs (2005: 49-59) は、長年修道志願者たちと面接してきた経験から、多くの者が誤った動機によって修道生活を志すと指摘する。たとえば、慢性的な疾患に苦しむ者が通常の仕事よりも修道生活の方が体への負担が少ないと思って志願する場合などが挙げられている。この他にも、未熟な若者が宗教的な熱狂に駆られて修道生活を志願する例や、聖人伝などをまねて奇妙ないでたちで修道院に現れる者の例、親が子どもを修道者として奉獻すると勝手に誓いを立ててしまう例、そして結婚生活や家族の問題から、生活

苦から、あるいは失恋のショックから修道院に逃げ込もうとする例などが誤った動機として紹介されている。

なお、修道院長、司教および総主教などの高位聖職者は修道士の中から選ばれることから、教会組織内で立身出世を狙う者が修道院に入るのではないかと一般に考えられがちである。その点について al-Anbā Makāriyūs (2005: 61) は、修道士全体の数に対して司教などの職は限られているため、修道士になっても指導的な地位に就く保証はないし、そもそも立身出世を狙っている時点で禁欲主義を旨とする修道生活を志していないので、そのような人物が無理に修道生活を試みても長続きせず失敗に終わる可能性が高いと指摘する。

また、興味深いことに、al-Anbā Makāriyūs (2005: 43-44) によると、実際に修道士になった者たちにその理由を尋ねてみると、明確な理由や契機もないままに、なぜか突然修道生活に心惹かれるようになった者が多いのだという。ある修道士が語るには、かつて自分はそれほど宗教に関心がなく、教会によく行き神や聖人の話ばかりしているような人びとを小ばかにしていた、という。しかしある日、母方の親戚にあたる修道士が自宅を訪ねてきた時、「おそらく深い眠りについていて自分の中の修道士が目を覚まし」、気づけば修道院の門をたたいていたのだという。別の修道士の場合、ワーディー・アン＝ナトゥルーンの修道院群を訪れる気軽な日帰りツアーに参加した際、それまで全く関心がなかったにも関わらず、突然「もう一つの世界」で修道生活を送りたくなり、そうすることに決めたのだという。このように、修道士になるつもりはなかったのに、本人たちにもわからない何かによって修道生活に導かれる例は珍しくないという。

より明確な契機がある例では、上述のマッター・アル＝ミスキーン修道院長の著書を読んで感銘を受けた、父親の死の床で聖母マリアを見た、実は失恋がきっかけだったなど (山形 1998: 71-88)、あるいは 1967 年¹²⁾の戦争に兵士として参加した者が、戦場で爆撃され同じ隊の兵士たちが次々に命を失っていく中で、生き残ったら修道士になると誓いを立てた (Bishāy 2008: 63-64) など、さまざまである。また、市中の教会に勤務する修道司祭から影響を受けた例や、修道士でもあった聖人に憧れたという例もある。

修道女の場合は、子どもの頃から結婚に関心がなく修道生活を望んでいた、聖人の姿を見た、夢のお告げを受けた、などの理由の他に、本人がカトリックのミッション系学校出身で、そこで働くカトリックの修道女たちから影響を受けて修道生活を志したという例もある (van Doorn-Harder 1995: 77-78)。

それでは、このように修道生活に招かれた人びとは、どのような段階を経て修道者になるのだろうか。修道生活を志す者は、6 か月程度の志願期を過ごすことになっているようだが、男子修道院の場合、実際には 1 週間以内であったり 1 年以上であったりと、かなりの幅がある¹³⁾。男子修道院の場合、志願者の年齢制限はないが、兵役の義務を終えているか免除を受けていることという条件があるため、必然的に成年に達している必要がある。志願者には大学卒業者が多く、志願する時点で 25 から 30 歳ごろの者が多いようである (al-Anbā Makāriyūs 2005: 69)。他にも、結婚歴がないこと、逃亡中の犯罪者でないこと、伝染性の病気に罹患していないことなど、いくつかの条件が課されている。女子修道院の場合は、年齢制限が 22 から 27 歳までとなっており、大学卒業者で、職務経験があることが望ましいとされている。志願期に入った後、男性の志願者の服装は変わらないか、あるいは修道院によってはガラベージャと呼ばれる長袖の貫頭衣を着ることになっている。女性の志願者は頭にスカーフを巻く (van Doorn-Harder 1995: 72-74)。この間、志願者たちは修道院に定期的に通って霊的指導者から修道生活についての指導を受ける。

その次の段階が修練期で、志願期から修練期への移行には非公式で簡単な儀式が教会で行われるのみである。この期間、修練者は何も持たずに修道院に住み込み、修道生活を実際に試しながら適性を見極める。志願者が多いため、男子修道院では志願者の 5 パーセントほど、女子修道院では 1 パーセントほどしか修練期まで進まないようである (al-Anbā

¹²⁾ Bishāy (2008: 63-64) の原文では 1969 年の戦争と書かれているが、第三次中東戦争の年にあたる 1967 年の誤植であろうと思われる。

¹³⁾ al-Anbā Makāriyūs (2005: 83) は少なくとも 1 年以上としている。

Makāriyūs 2005: 47; van Doorn-Harder 1995: 72)。この修練期の間、男性は白いガラベヤを身につけ、名前の前に「アフ (akh, 兄弟)」という敬称がつけられるようになる。女性の場合は黒いスカーフで頭を覆うようになり、敬称はコプト語由来の「ターズニー (tāsūnī、私の姉妹)」である。修練期は修道院によって期間が異なり、1年ほどから3年以上と幅がある。

その修道院の修道院長や聴罪司祭、霊的指導者やほかの修道者たちの間で、その修練者の適性が認められた場合、その修練者は前日に知らされて、翌朝に修道誓願の儀式が行われる (al-Anbā Makāriyūs 2005: 83; Bishāy 2008: 166)。修道誓願の儀式が行われる前夜、修練者はその修道院の聖人の聖遺物のそばで、聴罪司祭やほかの修道士たちと共に、祈り、神を讃え、聖書を朗読して眠らずに一晩を過ごす。これは、十人の乙女のたとえおよびその後続く「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」(マタイによる福音書25章13節)という聖書の一節にちなんだものである。

朝がきたら乳香が焚かれ、修練者は祭壇の前に立ち、修道院長が読み上げる後に続いて修道誓願を唱える。清貧 (al-faqr al-ikhtiyārī)、貞潔 (al-'iffa)、従順 (al-tā'a) の三誓願である。そして修練者は祭壇、修道院長、参列者に向かって3回平伏して額づき、仰向けに横になる。その時、頭は東に向き、両手は十字の形に胸の上に組んだ状態にする (al-Anbā Makāriyūs 2005: 83-84)。その後修練者は、普段聖遺物を収納する箱を覆っている羊毛でできた棺衣を被せられ、暑く息苦しい状態で1時間半ほどを過ごし、他の修道者たちによって葬儀用の「死者のための祈り」が捧げられるのを聞きながら自らの儀礼上の死を経験する。コプトの修道院において、「修道生活とは、世界に対する、すなわち自己に対する、本物の、そして公的な死の道である。(al-Miskīn 2012: 3)」と考えられており、修道者になるということは、俗世の自分を捨てて一度死ぬことを意味するのである。修道者の聖別奉獻にあたって、三誓願を立てることよりもむしろこの儀礼上の死を経験することの方が重要であると考えられている (van Doorn-Harder 1995: 96-97)。

こうして一度死んでこの世を去った修練者は、棺衣を取り去られ、修道院長の前に立つ。修道院長は、新たに修道者になる者に、天使、聖人、預言者、著名な修道者などから選んだ新しい名前を与え、その名前を唱えながら修練者の髪を十字の形に切りぬく。そして修道服として、カランスワ (qalansuwa) と呼ばれる黒い頭巾、黒い修道服、そしてミンタカ (mintāqa) と呼ばれる革製の帯が与えられる。カランスワは中央の前から後ろに大きな縫い目があるのだが、これはアントニオスが悪魔と戦った時に頭巾が破けたという故事に由来する。また、カランスワには十二使徒を思い起すため12の十字架が刺繍されている¹⁴。修道服は黒で、修道者のこの世に対する死を象徴する。またミンタカと呼ばれる帯は、服の下の腰回りに締めるが、動物由来の革で作られていることから、これも死を想起させるものであると同時に、例えば食べ過ぎなどの身体的な満足を戒める意味もある。これらの修道服の着衣が済むと、聖体祭儀が行われ、修道誓願の儀式が終わる。新たに修道者となった者は、その後3日間修道院の庵室にこもって黙想することになっている。儀式の形は、男子修道院および女子修道院でほぼ共通で、聖書の朗読の箇所が多少異なるのみである (van Doorn-Harder 1995: 99-100; al-Anbā Makāriyūs 2005: 87-91)。

これ以後修道者は、俗世の名前を捨てて、修道名と誓願を立てた修道院の名前を組み合わせる自らの呼び名とする。たとえば、キリルス6世の修道士時代の呼び名はミーナー・アル＝バラームスィーであるが、ミーナーが修道士として新たに与えられた修道名で、アル＝バラームスィーはバラームス修道院の所属であることを示している。修道士に対する敬称は「アブナー (abūnā、私たちの父)」で、これは司祭に対する敬称と同じであるので混乱を生みやすい。多くの修道士が後に司祭に叙階されるが、一部には叙階されないまま修道士として過ごす者もいるからである。また、修道女のうち観想修道院に属す

¹⁴ この形の頭巾は、前総主教シェヌーダ3世がまだ修道士だった時代に導入したものであるが、シリア正教会の修道士の頭巾の形を取り入れたものであり、コプトの伝統ではないとして一部の修道院では受け入れられていない (van Doorn-Harder 1995: 99)。

る者の敬称は「ウンミナー (umminā、私たちの母)」あるいはコプト語由来の「タマーフ (tamāf、私の母)」で、活動修道院に属する修道女および「奉献された女性」の敬称はコプト語由来の「タースーニー (tāsūnī、私の姉妹)」である (van Doorn-Harder 1995: 229-231)。

このように、修道誓願を立てた者たちは、「この世に対する死者」として黒衣に身を包み、俗世の名前を捨てて、その一部は修道院の庵室あるいは砂漠の洞窟に隠遁し、沈黙の中で祈りと黙想の日々を送るのである¹⁵。

最後に、筆者が出会った「もうひとつの世界」を生きた修道士の思い出を書き留めておきたい。筆者は、大学院生時代に紅海の砂漠に位置するアントニオス修道院とパウロ修道院を訪れたことがある。当時は治安も安定していたので、かのアントニオスが隠遁生活を送った地に建てられたアントニオス修道院と近隣のパウロ修道院には、コプトの巡礼者のみならず外国人観光客もしばしば訪問していた。パウロ修道院には、生ける聖人¹⁶と呼ばれる人物がいた。ファーヌス修道士である。彼は両手あるいは体全体が光を放つとか、大天使ミカエルや聖母マリアと特に強い結びつきがあり、時々彼らの姿が見えたり言葉を交わしたりするとか、病気の治癒や予言の奇跡などの伝説に満ちた人物で、当時既にコプトの人々の間ではかなり有名だったようだが、筆者はよく知らなかった。

パウロ修道院を訪問した時、ファーヌス修道士が修道院の訪問客に祝福を与えるというので、筆者もその列に並んでみた。コプトの巡礼者たちによると、ファーヌス修道士に会えるのは滅多にないことらしく、周りの人々は興奮気味だった。順番が来ると、ファーヌス修道士は筆者の顔を見て、何かに気づいたように「うん？」と唸り、懐中電灯を持ち出してきて筆者の顔に向けた。眩しかった。時間にしてものの数秒ほどだったのだろうが、何が起きているのか、どう振る舞うべきなのかわからず、妙に長く感じた。ファーヌス修道士は、その後納得した様子で頷きながら「んんん」と再び唸り、額と両手首の内側に聖油を塗って祝福を授けてくれたのであった。

この出来事をどう解釈すればいいのか、いまだにわからない。コプトの友人たちに聞いても納得のいく説明はなかった。生ける聖人は何に気づき、何に納得したのだろうか。あの光は何かの象徴だったのだろうか……。考えすぎると、気づけば棺衣に覆われているかもしれないので、この辺でやめておこうと思う。それは、突然来るらしいので。

15 ただし、活動修道院の修道女たちの修道服は灰色で、彼女たちは祈りや黙想も行うが基本的には学校や病院などで使徒職に従事する。

16 正式な列聖手続きとしては、当該人物の死後、教会会議で認定される必要があるが、ファーヌス修道士は2016年に亡くなる前から既に信徒たちの間で聖人扱いされていた。

参考文献

- アタナシオス「アントニオス伝」戸田聡 (編訳) 『砂漠に引きこもった人々—キリスト教聖人伝選集』教文館、2016年。
- アティーヤ、アズィズ・S. (著)、村山盛忠 (訳) 『東方キリスト教の歴史』教文館、2014年。
- サバレーゼ、ルイーダ (著)、田中昇 (訳) 『解説・教会法—信仰を豊かに生きるために』フリープレス、2018年。
- 杉崎泰一郎 『修道院の歴史—聖アントニオスからイエズス会まで』創元社、2015年。
- 戸田聡 『キリスト教修道制の成立』創文社、2008年。
- フランク、K. S. (著)、戸田聡 (訳) 『修道院の歴史—砂漠の隠者からテゼ共同体まで』教文館、2002年。
- 山形孝夫 『砂漠の修道院』平凡社、1998年。
- Athanasius of Alexandria. *The Life of Antony: The Coptic Life and the Greek Life*. Trans. Tim Vivian and Apostolos N. Athanassakis. Kalamazoo, MI: Cistercian Publications. 2003.
- Chitham, E. J. *The Coptic Community in Egypt: Spatial and Social Change*. Occasional Papers Series No. 32. Durham: University of Durham, Centre for Middle Eastern and Islamic Studies. 1986.
- Elsässer, Sebastian. *The Coptic Question in the Mubarak Era*. Oxford: Oxford University Press. 2014.
- Guillaumont, Antoine. ‘Macarius the Egyptian, Saint.’ in Aziz Suryal Atiya (ed.). *Coptic Encyclopedia*. vol. 5. 1991. pp. 1491a-1492a.
- Hasan, S. S. *Christians versus Muslims in Modern Egypt: The Century-long Struggle for Coptic Equality*. Oxford: Oxford University Press. 2003.
- Jullien, R. P. M. *L'Égypte: Souvenirs bibliques et chrétiens*. Lille: Société Saint-Augustin. 1891.
- Meinardus, Otto F. A. *Monks and Monasteries of the Egyptian Deserts*. 5th edition. Cairo: American University in Cairo Press. 2003.
- Van Doorn-Harder, Pieterella. *Contemporary Coptic Nuns*. Columbia SC: University of South Carolina Press. 1995.
- al-Anbā Makāriyūs. *Limādhā Tuqbil Shabāb al-Aqbāṭ ‘ala al-Rahbana?* Cairo: Markaz al-Diltā li-Ṭibā‘a. 2005.
- al-Anbā Matā‘us. *Al-Shamāmisa wa al-Shammāsāt*. Mariyūṭīya: Dayr al-Sayyida al-‘Adhrā’ Maryam al-Suryān. 2005.
- al-Miskīn, Mattā. *Naṣā‘ih li-Ruhbān Judud wa Ikhtibār Allāh fī Ḥayāt al-Rāhib*. Barrīyat Shīhīt: Dayr al-Qiddīs Anbā Maqār. 2012.
- Bishāy, Ilīs Iskandar. *Al-Rahbana al-Dayrīya al-Qibtīya al-Mu‘āṣira: Dirāsa Anthrūbūlūjīya bi-Wādī al-Naṭrūn*. Dār Māryā li-Ṭibā‘a al-Ḥadītha. 2008.
- Rāhib min Dayr al-Suryānī. *Al-Zayy al-Ruhbānī*. Dayr al-Suryānī. 1989.
- al-Anbā Ghubriyāl. “Lamḥa ‘an Dayr Banāt Maryam fī Banī Suwayf.” *Majallat al-Kirāza*. No. 3-4. 25 January 2013. (バニー・スワイフにおける聖母マリアの娘たち修道院についての概観)
URL: <http://www.alkirazamagazine.com/ArticleDetails.aspx?ArtID=30&IssueID=7&LanguageID=1> (最終閲覧日 2020年11月9日)。
- Mawqī‘ al-‘Anbā Taklā Hīmānūt. Qā‘ima al-Adyura al-Qibtīya al-Urthūdhuksīya fī Miṣr wa al-‘Ālam. (エジプトおよび世界におけるコプト正教の修道院リスト)
URL: <https://st-takla.org/Coptic-History/places/monasteries/index.html>

(最終閲覧日 2020 年 10 月 29 日)。

PopulationPyramid.net. 2019a. Egypt 1960. URL: <https://www.populationpyramid.net/egypt/1960/>
(最終閲覧日 2020 年 10 月 29 日)。

PopulationPyramid.net. 2019b. Egypt 2008. URL: <https://www.populationpyramid.net/egypt/2008/>
(最終閲覧日 2020 年 10 月 29 日)。

Living in another World: Monasticism and Monastics in Contemporary Egypt

Hiroko MIYOKAWA

Summary

Egypt is the cradle of Christian monasticism, and the history of monasticism is usually written from St Antony the Great, the father of Christian monasticism. However, monasticism in Egypt after St Antony and his disciples is almost totally forgotten and rarely mentioned in the histories of western Christianity; yet, Egypt has kept its desert monasteries and convents through the centuries even after the Islamization of Egypt. This paper investigates the situation of contemporary monastic life in Egypt, discussing the monastic systems between tradition and reform, novices and the process of their acceptance, initiation rituals, and a memory of a monk in St Paul's Monastery.

キーワード
現代エジプト コプト 修道制 キリスト教

Keywords
Contemporary Egypt Copt Monasticism Christianity